名張市史だより
NABARI HISTORY LETTER No.14
平成29年2月25日

●編集発行●
名張市郷土資料館（教育委員会文化生涯学習室）
〒518-0734　名張市安部田2270番地
名張錦生ふるさとパーク内
☎64-7890

大政奉還150年
―名張藤堂家関係資料と藤堂藩京屋敷―

２０１７年は、十五代将軍徳川慶喜が政権返上を明治天皇に上表した慶応三年十月十四日（１８６７年11月９日）の大政奉還から１５０年目にあたります。源頼朝の鎌倉幕府から６８０年余りにわたる武士による封建制度が終焉を迎え、日本が近代国家へと進む大きな転換の時でもありました。

日本史の中でも特に戦国時代とともに幕末維新期は人気が高く、いろいろなドラマや小説、映画などにも描かれており、今年は二条城をはじめ大政奉還に関係するいろいろな特集が企画されることでしょう。

実は、名張藤堂家邸に保管されている市指定文化財「名張藤堂家関係資料」３２８５点には、「大政奉還建白書写」（慶応三年十二月）をはじめ、幕末維新関係文書１４１点が残されています。また、この古文書を翻刻した「名張市史料集第六輯上下巻」（平成14年市立図書館発行）が刊行されています。

では、藤堂藩は幕末の動乱期、どのような活躍をみせたのでしょうか。『名張市史』（昭和49年中貞夫著）によると『藤堂藩は、外様であるとはいえ藩祖高虎の時代から徳川家より特別の待遇を受けていました。よって藩論は幕府を補佐する佐幕派に傾倒していましたが、藩校「有造館」督学（いわゆる校長）であった川村尚廸は「朝廷は父、幕府は兄である。兄にして父の命を奉せずば不孝の子である。不孝の兄に従って父に背くは天道に反す」。と勤皇論を説いていました。第十一代藩主高猷の立場は微妙で、徳川家に恩顧を感じながらも勤皇論を顧みないわけにもいかず、幕府を補佐し朝廷に忠勤するという公武合体論に近い考え方に立っていた』と言われています。

舞台はまさに坂本竜馬や新撰組が活躍した京都を中心に展開されていきます。藤堂藩は、大政奉還の諮問が行われた二条城から堀川通を南へ1キロメートル程下った現在の堀川高校の場所に京上屋敷がありました。また、京下屋敷は、上屋敷から少し西へ行った新撰組が屯所や訓練所として使っていた八木邸、壬生寺の東側にありました。切迫する時局の中、藤堂藩もいざというときのために屋敷に多くの警護役を置いていました。この警護の任にあたっていたのが伊賀地域の無足人（半農半士の下級武士）の若者たちであったのです。きっと通りを歩くのダンダラ羽織を着た新撰組隊士たちをよく見掛けていたと思います。

藤堂藩京屋敷跡の碑
（京都市中京区　現堀川高校）

大政奉還の2年前に起こった天誅組の乱においても、幕府から津藤堂藩、紀州藩、彦根藩などに討伐が命じられ、藤堂藩では直ちに京都警護中の藤堂新七郎の部隊（伊賀勢）を現地に派遣し、続いて上野から藤堂玄蕃隊を合流させ、津から少数の幹部だけが指揮官として駆けつけたのです。天誅組の鎮圧は、伊賀の無足人隊（鉄砲隊）を主力に行われたのです。

鎮圧の様子は、赤目町柏原に残されている「和州騒動の図」（市指定文化財）で垣間見ることができます。

大政奉還から3カ月後の慶応四年正月には、徳川慶喜が薩長討幕派の京都を封鎖するため、旧幕府軍約１５０００人を大阪城から京へ向けて進軍させました。藤堂藩も旧幕府軍として京都山崎へ進軍、高浜砲台へ駐屯します。

鳥羽伏見の戦いで薩長の3倍の兵力をもった旧幕府軍ではありましたが、薩長の近代武装により苦戦を強いられ、伏見鳥羽方面から押し返され、やがて有名な錦の御旗が繰り出されたことにより薩長が官軍、旧幕府軍が賊軍という構図になりました。退却する旧幕府軍を老中職にあった稲葉正邦の淀城は、城門を閉ざし旧幕府軍を城内に入れず、そこへ淀川を挟んだ対岸の藤堂藩より砲撃が加えられたことにより、土方歳三らが指揮する新撰組隊を中心に旧幕府軍は総崩れとなり、大阪城へ撤退し、その夜、慶喜が大阪城から海路、江戸城へ退却してしまいました。

記録によると正月三日には、王事につくすよう勅旨が伝達されますが、藤堂藩としては態度を決めかねていました。開戦前日の5日には、旧幕府軍より出動要請があり、さらに朝廷からは、駐留する山崎へ勅使として四条隆謌侍従が直接出向き、朝廷に与する事を出先隊長藤堂采女に迫ります。現場の一存では返答できないと猶予を願いますが受け入れられず、総帥藤堂采女が全責任を一身に負って藤堂藩は、朝廷側に踏み切ったのです。この藤堂藩の行動が旧幕府軍と薩長軍の勢力均衡を逆転させ、旧幕府軍敗走の要因となったのです。

現代のようにテレビやネットで瞬時に情報が入る時代ではなかった頃、刻々と変わる情勢を国元に知らせる書状は、貴重な情報源として藩の行く末を考える判断材料になったことでしょう。残された史料をみていきますと、現地で情報収集にあたる藩士やその書状を受け取り情勢を分析し藩の行く末に苦慮する家老たちの緊迫した様子が想像できます。

これから寒さも緩むシーズン、京都の幕末維新の舞台となった名所を藤堂藩目線で巡ってみてはいかがでしょうか。１５０年前に名張の若者たちが見た竜馬や近藤、土方、維新の志士たちの光景がより身近に感じとれるかもしれません。

壬生寺（京都市中京区）

第１巻「名張市史 資料編 考古」
第２巻「名張市史 資料編 古代」
書籍版…5,000円、CD-ROM版…1,500円
「おきつもの名張今と昔」800円

好評、販売中です。
販売場所
郷土資料館または、
市役所３階文化生涯学習室